谷文晁の縮図三種

①京都国立博物館蔵本
袋綴　二三・六糎×一六・七糎
②京都　個人蔵本
袋綴　二四・七糎×一六・四糎
③京都　個人蔵本
袋綴　二六・〇糎×一九・〇糎
〔図版11・12〕

京都国立博物館は狩野探幽が永年にわたって描き続けた縮図類を数多く所蔵しており、その全貌はすでに館蔵品図録『探幽縮図』上下二冊として公刊されている。探幽という良くも悪くも一代の画人の、いわば厖大な備忘録とでも呼ぶべき集積をまのあたりにするとき、この絵師の飽くなき執念に圧倒される思いがする。

ここに紹介する縮図帖は、狩野派が往年の活気を喪失した江戸時代後期において、探幽に勝るとも劣らない画技と社会的名声を得た谷文晁（一七六三―一八四〇）の筆になるものである。文晁にとって縮図はどのような意味をもっていたのであろうか。弟子の船津文淵に与えた画訓によって、文晁の縮図制作の根本動機をうかがうことができるだろう。

学画先づ初めは古人の数本を模し、又或は師にたより伝聞し、古画の趣意を知り由候。扨其後は事々物々形象に求め候て其形状をきはめ、形象を意に覚え熟候。扨其後写生を破り一家を成し申候。（中略）然るを今の学画者は古人を師とし候もの少く、只あれこれと、目に任せ見学乱筆して本意を失なひ候もの多く有之候。（萬鐵五郎『文晁』所引）

筆者には、右の言葉に、ひたすらな伝統主義や一途な写生中心主義とも異なる、しかしまたそれらをも決して無視するのでもない、良き個性主義の提唱があるように思える。弟子の渡辺崋山や椿椿山などは、この文晁の主張の実践者とみてよいのではなかろうか。文晁の古画の縮図や写生帖は、右のごとき信念に裏付けられていたのである。恐らくは探幽においてもそうであったように。

①京都国立博物館蔵本　一冊（図版11・12、図1）

これについては既に『日本美術工芸』五〇九号において若干紹介したことがあるので、簡単に記すこととする。

体裁　袋綴。

表紙　薄茶色。二三・六糎×一六・七糎。左上隅に題簽があり「谷文晁先生古図縮臨」と墨書。

丁数　五十丁。但し、表紙見返しにも図あり。

款印　裏表紙見返しに「吉川霊華蔵」の墨書。表紙見返しと五十丁裏（以下、丁付けは例えば一丁表は一オ、一丁裏は一ウと略す）に「高島書屋」の朱文長方印。蔵書家として著名の砲術家・高島秋帆の蔵書印か。

年記　一ウに「文化己巳仲冬」とあり、文化六年（一八〇九）以降の制作かとも思われるが、文晁の縮図はアトランダムに綴じられる場合が多く、未詳とすべきか。

内容はほとんど古画の縮図とみてよいもので、写生らしきものは少ない。中で注目すべきものは久隅守景筆の十二ケ月屏風（図版11）、曾我直庵筆の架鷹図屏風（図版12）、大岡江阿弥、大岡春卜の竹林七賢図および楼閣山水図（図1）などの縮図であろうか。

②京都個人蔵本　一冊（図2・3）

体裁　袋綴。但し絵そのものは袋綴の形態の中に一枚一枚貼り付けている。

表紙　薄美濃紙。二四・七糎×一六・四糎。題簽はなく直に「仏像諸天部」と墨書。

丁数　二十丁。

奥書　「天保八年丁酉仲秋　結干七艸庵中」。

款印　一オ、四オ、十オ、十二ウ、十五ウ、十九ウ、二十オそれぞれに朱文方印「谷氏文晁」。また所々に「山崎羯摩堂所蔵印」なる蔵書印が捺される。

内容は、表紙墨書（文晁自筆と鑑される）にも明らかなように仏像諸天を半張に一図ずつ描いたものである。名称を掲げたものを順に記すと「摩和羅女」「広目天王」「散脂大将」「沙迦羅王」「那羅延堅固」「密迹介」「毘沙門天」「大金色孔雀明王」「乾闥婆王」「増長天王」「風天」「緊那羅王」「難陀龍王」「帝釈天王」「梵天王」「阿修羅王」「迦楼羅王」「神母天」「金毘羅王」「満譙車王」「婆藪仙人」「弁才」。各図にはほとんど淡彩がほどこされているのみならず、色注が「地六文キン（地は緑青、文様は金）」「天衣ヲ六ウ白六（天衣は表を緑青で、裏を白緑で）」という具合に記されている。

天保八年（一八三七）は文晁七十五歳に当る。この年、法眼位に叙せられており、まさに功なり名を遂げた観があった。しかし、この時点においてもなお古画を縮図しようとする文晁という個性は、探幽と隔たるところがない。

③京都個人蔵　一冊（図4・5・6）

体裁　袋綴。

表紙　わずかに藍色が残る。二六・〇糎×一九・〇糎。墨描の重廓の題簽を貼るが、題字はない。

丁数　五十一丁。

款印　一オ、十一オ、四十一～五十一のウに「谷氏文晁」の朱文方印。

これは前二者とは性格を異にして、絵手本刊行のための稿本であるように思われる。内容は、花鳥図・花卉図・花木図・山水図等であって、一図にはすべて画題を記し、画もいわゆる心覚えの縮図とは異なり、丁寧な筆使いである。丁付けこそないものの柱刻の部分も備わり、廓線も定規を用いて引いていることからみて、上の想像は蓋然性を増す。画題の一部を以下に記すと「梧竹清涼」「松風水月」「芝蘭富貴」「色染新霜」「甲兵襲城」「三益三友」「平安長春」等々である。さらに稿本であることを想像させるのは、四十二オから最終張までの部分である。この部分はすべて山水図で、丁のオモテは右側、ウラは左側に空欄を設けて、画法書の形態を示している。図には画題と共に皴法が記される。それらは「披麻皴法」「乱摩皴法」「披麻并鮮索皴法」「芝麻皴雲頭法」「大斧劈皴法」「小斧劈皴法」「雲頭皴法」「牛毛皴法」「荷葉皴法」「雨点皴法」「渾渦皴法」「乱柴皴法」「礬頭皴法」「馬牙皴法」「鬼皮皴又曰枯髏皴」「折帯皴法」「大混点法、米元章喜作之」「小混点法、米友仁遺意」等である。

（狩野博幸）

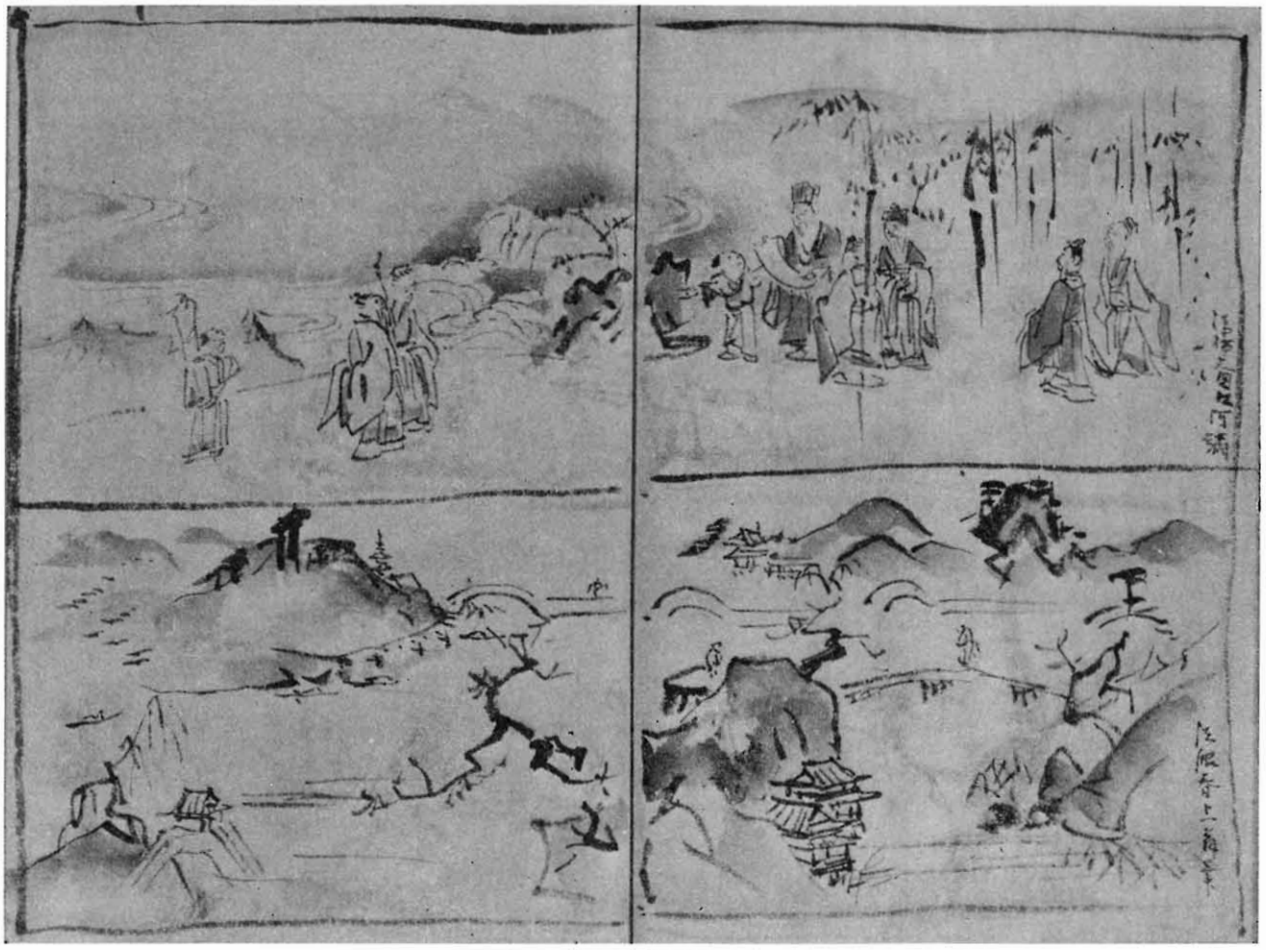

図１　『文晁縮図』（京博本）―江阿弥筆竹林七賢図・春卜筆楼閣山水図―

図 2　『文晁縮図』（京都個人蔵本）

図 3　『文晁縮図』（京都個人蔵本）

図 4　『文晁縮図』（京都個人蔵本）

図 5　『文晁縮図』（京都個人蔵本）

図 6　『文晁縮図』（京都個人蔵本）